

## 【中学部 数学 実践の概要】

- 中学部2年 数学 (単一障がい学級)
- 本時の題目：友だちの作った問題を、ひっ算を使って計算しよう
- 本時の目標：
  - ・ひっ算を作って計算をする際に、一の位と十の位を合わせて作ることがわかる。(知・技)
  - ・一桁+二桁のひっ算を作って計算する際に、位ごとに正しく数字を表記することができる。(思・判・表)

授業者のねらいとしては「文章問題を読んで足し算であることがわかり、ひっ算を用いて、答えることができるようになる」というものであった。対象生徒は一桁+二桁のひっ算の計算で位を間違える傾向があるので、そこに注意しながら、問題を解くように授業を展開した。本時では繰り上がりのないひっ算の問題を解くことが活動の中心であった。最初に導入で10の補数の考え方を身につけるトランプゲームを行い、前時の振り返りを行い、友だちが作った文章問題を解くという流れであった。

## 【良かった点・工夫されていた点】

- 生徒が考えた問題を解くということで、自分事として取り組む姿が見られた。
- 自分で作った問題をみんなの前で発表することで、対話的な場面が生まれていた。
- 暗算で解くことができる生徒においても、ひっ算を用いて答え合わせを行う様子が見られた。

## 【課題】

- トランプゲームは、神経衰弱の要素が強く、記憶の保持に困難さのある子どもにとってはやや難しいゲームとなっていた。導入の活動として精査する必要があるものであった。
- 友だちの作った問題を生徒間で解き合う場面は、生徒自身も皆に解いて欲しいという気持ちで取り組むことができていた。しかし、導入に時間がかかってしまい、問題数が全部で6問(1問は教師が提示)しかなかく、活動量としては少なかった。
- 生徒たちが作った問題は、5問中4問は『二桁+二桁の問題』であり、対象生徒の課題であった『一桁+二桁の問題』は1問しかなかった。(教師が追加問題として1問提示)
- 繰り上がりのないひっ算の問題であったので、半数以上の生徒は、暗算で問題を解いていた。
- 振り返りの時間の設定ができず、生徒たちの意見を聞くことができなかった。

## 【助言】

- 10の補数の考え方は、繰り上がりのあるひっ算の時に有効な考え方なので、繰り上がりのある問題を解く前に導入した方がよい。
- 生徒が他の生徒に問題を発表しあうことで対話的になっていたが、活動量が少なく、対象生徒のめあての達成には不十分であった。大事なことは、題材・単元を通して主体的・対話的で深い学びになるようにすることである。今回は「対話的」を意識しすぎて活動量の確保ができていなかった。本時の展開としては、めあてを達成するためにもう少し問題数を解ける展開にした方がよい。
- ひっ算を用いずに答えていた生徒が多かった。的確な実態把握を通して、繰り上がりのある問題、繰り上がりのない問題と、生徒の実態に応じた問題を用意する方がひっ算を学ぶ意義を感じることができた。
- ◎授業後、2人の生徒に話を聞いた。
  - 生徒A：「今日の授業で勉強したことは、コンビニの支払いで生かせると思う。それに放課後デイサービスの時に数学の活動の時間があるから、その時に生かせると思う。」
  - 生徒B：「お母さんみたいに計算を早くできるようになりたいから、ひっ算の勉強を頑張る。」
- と2人ともこの授業を生活に生かした学びにしようと考えていた。深い学びは、既習事項と、新しく学んだ事を結び付けて「なるほど」や「それなら」といった子どもたちの気づきにつながっていくことが重要である。このような発言を生むための問いかけを授業内で行い、生徒たちが何を学んだかがわかるような『振り返りの場面』を設定するとよい。